

[要旨]

フランスの政治文化とデモクラシー —— P. ロザンヴァロンのフランス・デモクラシー論 ——

野末 和夢

本稿ではピエール・ロザンヴァロン(1948-)の主著を中心にしてフランス型のデモクラシーを考察する。フランス政治思想史研究において、個別思想家を軸とした研究は進んできたが、その全体像が十分に検討されているとは言い難い。さらに、フランス・デモクラシーというテーマで思想史を包括的に語る研究も多くはなかった。ロザンヴァロンによるフランス・デモクラシー研究は、先行研究の継承と一次資料の渉猟に基づき、現代フランスの学術界を代表する卓越した業績として位置づけられている。しかし、日本においてロザンヴァロンに注目した研究はほとんどない。本稿は、彼のフランス・デモクラシーに対する解釈図式を抽出することを目的とする。

まず、革命期のジャコバン主義が「政治的なもの」の思考様式として定義される。これが二世紀間続いてきた「一般性の政治文化」を形成する。次に、デモクラシーの解釈に際して、「分極化」という語彙が鍵概念となる。ロザンヴァロンによれば、「政治的なもの」と「社会的なもの」とは「分極化」される。革命期以来、この「分極化」を基盤として、デモクラシーが構成されていく。また、「社会的なもの」は「政治的なもの」によって排除・抑圧されたものとして描かれる。最終的にロザンヴァロンは、「社会的なもの」をフランス・デモクラシーにとって「周縁」として位置づけることで、「政治的なもの」を「中心」にして形成されたデモクラシー史を提出する。つまり、共和国の一体性や統合が「政治的なもの」に基づいて保障されてきたことを結論づける。最後に、以上のデモクラシー史の検討を通じてこそ、こうした彼の歴史認識に反映されているロザンヴァロン自身の思想が確認される。